

「文章表現力」を高める授業展開

森 洋子^{*1}, 吉良めぐみ^{*2}

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2010年9月24日)

Developing Classes to Improve Writing Skills

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MORI Yoko, KIRA Megumi

(Received September 24, 2010)

入学時の学生の基礎科目である文章表現力育成の授業を担当し、大学で必要とする文章表現力を育成するために、表現内容を小論文論述に置き、書く活動の意義理解の深化を図る学習内容とその授業展開を追究した。

多人数の学習者の多様な学習実態に即した授業展開の方法を、論述課題の選択を基に追究し、学士力育成を目指す初年次教育科目の内容改善に繋ぐ意図を持っている。

1 はじめに

入学してくる学生の多様化が進む中で、確かな学士力を有する人材を育成することを課題として全学で初年次教育の在り方の研究を進めている¹⁾。その中で、学士力確保のための三本柱とするコアカリキュラムを設定し、その柱の一つが「専門教育に必要な基礎的な知識の習得」で、専門教育の理解とその達成をめざす教科を組み入れている。国語・数学等とともに、文章表現の力をつける「自己表現」の科目がここに組み込まれている。これは本学の全ての学科・専攻において、文章表現力を育成することは必要不可欠のことであるとの認識に因るものであり、全専攻の入学年次の必須科目に位置づけて、基礎力の促進を図っていくように仕組んだものである。

その科目の担当者として、所期の成果に結

ぶ学習内容の設定、百人を超す授業者の一斉講義の授業方法、また文章を添削することに腐心してきている。

一方、学習者は、これまで高校時の作文の授業は、もうご免の顔色であり、初回ガイダンスの時点で、学習への期待も意欲も湧かない様相を見せる。書いてきたのではなく、書かされてきたの印象しか残せない文章表現学習なら当然のことであろう。表現への意志を持たないが、学習として表現しなくてはならない、また、精一杯表現したつもりなのに不十分であるとの朱書きしか返ってこないという作文指導の困難さにも因るものである。

なぜっ？ と、首を傾けたくなる実態の例を、少し引く。彼女たち(女子大であるから)は、「小学生までは、むしろ文章を楽しく書いてきた。ところが、中学生からの感想文、意見文が課題になるころから、何を書いたら

良いのか分からなくなり、書くことが嫌いになった」と80%以上が口を揃えたかの如くに言うのである。特に読書感想文については、「例年悩みの種で粗筋を書いて無理矢理提出した」と各県からの出身者が言う。この全国一円の傾向に驚く。つまり、これまでの文章表現は、体験を基にその時の情意を加えて思いのままに表現する作文に終始し、その段階に留まっているという実態にある。

これらの状況と学生の実態とを踏まえ、「自己表現」の学習内容を、大学での専門教育の基礎となる力の育成とするには、論述を主体とする表現力の育成であるとし、その指導法を追究していくこととした。

以下に、表現力育成の授業展開とその学習内容理解の深まりを求めたことを述べる。

2 研究の背景と目的

入学生たちの今後の学習は、日常の授業のレポートを書くことに始まり、卒業論文の大作に至るまで、書くことによって深めていく。その書く内容は、自分の論理を述べることに尽きる。ある授業では、時には「気づいたこと」「感想」を書くように求められることもあろうが、いずれにしても、求めに応じて思考し考えを纏め、的確に表現していく上では、論述と言えよう。

これらの考えに立ち、文章表現の内容を「小論文」の表現に置き、自身の考えを立て、考えの根拠を述べる表現の仕方を学習させていくことにした。

最初に必要なのは、学習者たちに書くことの必要感意識を図ることである。学習者たちは大学入試のための、また単位習得のための表現学習とする認識が強い。表現することの目的である「自らの考えを相手に的確に伝えていくために書く」、つまり「広く深く伝

える的確な手段であるから、文章表現力を身につける」とする意識が要る。このことは、スタート時のみならず全学習過程を通し高めていく感覚であり、本授業の目的とするところである。自らの思考の促進は、書く行為に因って達成していくもの、大学生らしく、書くことは最良の学習方法であることが自覚できる授業展開として、書くこと、即ち思考することと連鎖した文章表現授業の追究をしていく。

3 研究の方法・内容

(1) 授業内容の精査

15回の授業時間を以下のように計画した。

①指導に先ず必要なことは

- ・学習者が持つ問題点を知ること
- ・学習経験の実態 書くことへの意識の実態
- ・現時点での文章表現力の実態と学習者の実態の把握である。

②授業の中核は、「5本小論文を書くこと」。

5本の小論文の表現力を、授業検証すること。

書くことの累積回数と表現力の高まり度の調査

③学習後のポストテストと意識実態を調査して、達成度を見る。

(丸番号は上記の授業内容)

授業展開と検証計画

回	研究項目	内容
1		オリエンテーション 書くことの意味・意義の理解 本講義の全体内容 小論文5回の記述
2	①	プレテスト 書くことの技能・内容について実態把握をする 伝達としての文章表現

3	①	前時に書いた文章の評価 書き手の意向が伝わる文章表現の技法を確認する 読み手を意識と伝達内容 明確な主張点で示す 主張の根拠を示す
4	①	意識・実態調査 書くことへの過去の経験, 書くことへの意識づくり 自身の振り返りと表現への意識化
5		「小論文」小論文記述の基礎知識 読み手意識と伝達内容の明確化 内容の分かる題名設定 論述文の文型・表現技法 思考と表現とのつながり 次回の論述課題の提示
6	②	検証 小論文1 テーマ：学校 「テーマ」と「論題」の相違 考察の視点の解説 前作文からの改善点を明示
7		前時に書いた文章の筆削 筆削観点 論述の立場の提示の仕方 論拠と具体事例の関わり 小論文の言語の使い方 次回の論述課題の提示
8	②	検証 小論文2 テーマ：コミュニケーション力 題名と記述内容の一致 主張点の選択の仕方 論拠になる事例の書き方
9		前時に記述した小論文の筆削 筆削観点：文章の脈絡の理解 思考のある記述の仕方 次回の論述課題の提示
10	②	検証 小論文3 テーマ：持つこと 認識・意識の変容から問題意識
11		前時に記述した小論文の筆削 書く視点の焦点化
12	②	検証 小論文4 テーマ：道徳心 道徳の授業と実践活動の理解 心の高揚・変容の考察
13		前時に記述した小論文の筆削 課題に対する思考 説得力・脈略力・明快性
14	②	検証 小論文5 テーマ：自分の職に必要とする力 学習の集大成としての表現
15	③	ポストテスト 記述 事後の意識実態調査 達成度 認識の深化度

①の項に関する精査内容

プレテスト：文章表現に対する意識と表現力を「書くことへの意識」の作文で調査した。

アンケート調査では

「自己表現」4回目、学習の進め方が分かってきた段階で、書くことへの意識化を図る目的も含め、意識調査アンケート実施

アンケート内容 (調査人数181人)

- ①自分の文章力の程度 (A B C)
- ②文章を書くことに対する気持 (A C)
- ③本授業への努力度 (A B C)
- ④過去の文章表現授業の経験 (A B

調査内容：自己文章力 書く必要感意識
書くことの学習意識
表現力の向上態度
書く学習の既習体験

C)

- ⑤学習してきた文種 (小論 感想文 作文)

(数値上から見た結果は、ポストテストとの対比で後掲する。)

考察

文章力の自己評価は、世間で大学生にして書く力の不足が取り沙汰されているように、実に123人約70%が「不十分」であると自らも自覚し、世評一般と同一の実態である。

しかし、大学生らしく、文章を書く力の必要感は、1名を除く全員が「必要だと思う」と答え、今後の学習に、書く力の必要感は大いに意識していることを示している。

しかし、意識と努力は別ものである。大学生らしく不足する力を付けていくために「自己表現」の授業に積極的に向かう気持ちが湧くはずなのに、②の項を見ると、作文することを「とてもいや」とする学生が半数以上である。これは、文章表現すること(以下、書くことと記載する)それは気軽に、ではやっ

てみようとする気を起こせるものではないこと、達成の困難さの自覚に困っているものであろう。

しかし、「書くことはとてもいやなこと」と思っている学生の約80%が、この授業に対して「努力をしようとしている」と回答している。書きたくない、でも書かなくてはならないの相反する意識で授業に臨んでいる学習者たちであることが読みとれる。

アンケート表での④、⑤は高校までの学習経験についての回答である。書く経験が多いものほど表現意欲も強い。また、「文章表現」に取り組んでいる高校は、多くが小論記述を学習内容にしていることも把握できた。

・調査に見られる問題点1

★学習者は、書くことへの意欲が希薄であること

理由の大半は、「書き方が分からない」「何を書いたらよいか、書く内容が思いつかない」であり、18%は「経験がないから」であった。書くことそれ自体が全て困難を極めることと捉えていることである。

★書く目的意識が無いままに書いていること (別の調査結果から)

「書く目的を持って書くこと」このことの意味付けは、小中学生の実態から、国語科の学習指導要領で特に示されていることである。(書くことそれ自体を目的としている学習になり勝ち) 伝えたい・知らせる必要感の下で、書く学習展開があることである。

課題 目的意識を明確化した授業

調査に見られる問題点2

★書くことに対する既習体験が不十分であること。

高校までの学習において、文章表現力のための学習は、指導要領に示す時間に従って

実施されていることから考えれば、少ない筈はないが、学習者の学修意欲が乏しかったのであろう。また書く技法・内容等、累積の知識が不確定であることは、作文指導の困難さも示している。40人学級で、学習者一人一人の実態に応じて文章力をつける指導の困難さをこの実態が示している。書く力をつける指導は、熱心な指導者にとっても、一生懸命な学習者にとっても、極めて成果の見えにくい学習であり、成果が曖昧にもなり勝ちである。それは双方を消極的にさせ、点数に換算できる学習を優先させ、ますます書くことを遠ざけていることにもなる。この現状で、「書くことに自信を持つ」と回答した5人は、高校の授業科目で「小論学習」の内容を受け、徹して書く練習をし、書くことにさらに意欲的に努力しようとする意識に立っている。このような望ましい実態も確実に存在している。

課題 技法と内容とを追究する授業

②の項に関する精査内容

「小論文」で検証

(1) 検証小論のテーマ

論題設定に当たって、学習者の関心意欲を喚起し、問題意識が持てるようになることを旨とした。

- ・書き手の意識・実態に即した論題
- ・調査時間を要しない論題
- ・専攻と関連する論題

・テーマ：学校

在籍してきた学校について、自身の体験を基に、そのプラス面マイナス面の考察から、書く立場を定めて、主張点をもち、主張の論拠を述べる。

・テーマ：コミュニケーション力

日常的に耳にする今日の「コミュニケー

ション力不足」について、身の回りからその要因を考察し、一要因を主張点に取り上げ、主張の論拠を述べる。

・テーマ：持つこと

認識・意識の転換を図るため、寺沢修司の『持つこと』の文章読解を挿入した。

自身の日常生活に問題意識を持ち、持ちたいもの・持ちたくないものへと思考を広げ、自身の立場の主張点を定め、主張の論拠を述べる。

・テーマ：道徳心

社会生活でモラルの低下が頻繁に言われる。誰もが12年間の道徳教育を受けてきている。問題意識をもって自身を振り返り、道徳心の育成とは、を考察し、一点を主張点として、主張の論拠を述べる。

・テーマ：自分の職に必要とする力

在籍する専攻から、自身の社会への出口となる職業について、そこに向かうために養うべき力を考察する。職業とそれに必要な力について一つの主張点を持ち、主張の論拠を述べる。

(2) 小論記述の授業展開

・同一の展開を累積する

ア：90分の事例を基にする記述指導と次回テーマへの考察

イ：テーマに関する主張点の確認と70分の記述時間の確保

アとイを繰り返して5回重ねる。

アの時間の授業内容は、前掲15時間の表

イの後に個々の小論文の添削の時間が必要となるが、実態に即した的確な書き方指導に及ぶには、添削時間は数時間ではこと足りない。時間外に行うのである。添削の朱

書きが改善意識に繋がるか小論指導の難点である。

また、この朱書きは必ずしも効果的と言い切れなく、書き手と読み手の呼吸の一致も書く感情と深く関わることも見逃せないことである。

の中に書き込んだ通りに、毎回同一の過程でありながらも、指導事項は各自の記述に即したもので、段階を踏まえたものにする。(表の参照)

(3) 小論の評価

5回の繰り返しの指導に焦点的に向かわせる要素は、書き手の学習成果の手応えにあることとし、書き上げた小論に取って評価点をつけ、達成度を示した。

文章力を点数評価するということが、それを正しく行うことはできないこと、文章の持つ多面性を考えれば当然である。何を持って80点と70点を区分するか、区分の区切りの根拠は明確には示すことができない。

今回は、文章のもつ多面性を、技法：「ことばの使い方や表現形式」と内容：「論述の意味内容や思考」この二面でもって、評価をした。細かな数値では表せないところを、段階として評価する意図から、A・B・Cの三段階評価を採った。

この学習では、先ず初段階として求めたのは、書き手の実態から、技法の獲得に置いた。ただし、技法を整える意識の働きは、論の内容を基にした働きでもあり、いかに伝えるかの働きは、「何を」が在ることでもあるから、この二面は切り離して考えるものではないと考える。

学習者に分かりやすく、かつ学習目標とする内容から次を定めた

- ・文章構成が整っているか

評価観点

- ・論拠を分かりやすく述べているか
- ・書く内容に思考が伴っているか

この3点からみて、ABCの3段階評価とする。またC段階は、書くことへの努力の成果が見えていなく、評価できることが少ない状況にあるが、これも敢えて、Cの烙印を印さないこと、を授業者には伝えている。ABの評価点が貰える論述ができるようになることを目指そうと意識されればよい、その方が効果的な評価であると考えている。

この区分法でも評価の問題点は尽きない。書かれる文章には、技法には問題がいくつもあるが、内容の面では形式の技法を超える優れた思考の文章も少なくない。AかBと迷いつつも、此処ではBであると判定し、読み手に伝わる書き方への方向付けをすることを優先してきた。

添削文を返却する度にこの評価に一喜一憂する姿も多く見られたし、上位段階を目指しての質問もあり、この評価は効果的であった。

評価の設定は、書き手の目標達成度の具体表示であり、意欲を掻き立てることに役に立ち、集中力にも大いに寄与するものとして位置づくことと手応えがあった。

(4) 小論検証結果と考察

テーマ：学校 から書き上げた小論文を精読し、前述の評価観点により評価し、集団の達成度の検証をした

右記の表は、論述の5回の累積による、上達度を検証したものである。

A表から10人を抽出した。(学習者全体の中で表現力 中位を対象とした)

・B表から、a・b・cの学習者には学習成果が出ていることが分かるが、大半の学習者には読み取れない表示である。内実はそれぞれが上達しているのであるが大区分による評価

A表 (ここでは、C評価もCと表した)

	文章構成度	論述度	思考度	計
A評価群	B	B	C	12%
B評価群	B	C	C	17%
C評価群	C	C	C	79%

B表

個人名	文章構成度					論述度					思考度				
	1回	2回	3回	4回	5回	1回	2回	3回	4回	5回	1回	2回	3回	4回	5回
a	C	B	B	B	B	C	B	B	B	A	C	B	C	C	C
b	B	B	A	B	A	B	B	B	B	A	B	B	B	C	B
c	B	A	A	A	A	B	B	B	B	A	B	B	B	B	C
d	B	B	B	B	B	C	C	B	B	C	C	C	C	C	C
e	C	C	B	B	B	B	C	C	C	B	C	C	C	C	B
f	B	C	B	B	B	C	C	C	B	B	B	B	B	B	B
g	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
h	C	B	B	B	C	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C
i	B	B	B	B	B	C	C	B	B	B	C	C	B	B	B
j	B	B	B	A	A	B	C	C	B	B	C	B	B	B	B

法には現れてきていない。方法に課題がある。(学習者には、総合点で示すため、B○等の記号によって評価を与えた。)

・ここで、表から読み取ることは、文章表現力の三つの側面の対比である。構成度・論述度・思考度、それぞれの枠を見ると、明らかに構成度についての上達度が高い。

これは強制的な指導によるものではなく、理解が容易であることに因るものと判断する。小論文の文章構成は単純明確であることであり、書き手にも基本形として理解しやすい。

思考度については、本授業の課題とすることであり、その都度説明したが、成果に結びついていない。この面に関しては、5回程度の実践では到達できるものではないことを証明し、次期への課題である。

(思考度の判断については、・惰性による文章

運び・観念的語句による文章運び・一般的通念的な論述, これらの視点から判断した)

・B評価であっものが、後にCに下がること, これは, その時のテーマと本人との密接性による場合, またその時の本人の気力に因る場合と双方が見られた。

・授業のもう一つの課題, 「書く目的を明確に持つこと」については, 「課題出題者を納得させること」を重ねて言い続けた。しかし, 書き始めると, 徐々に相手意識は薄れ, 「課題のために書く」感覚に陥っていくことが, 提出される文章から伝わってくる。「相手との対話感覚をもって書き綴ると, もっと楽に独自のことばの文章が書き出せる」ことも言い続けた。添削で「もっと説明を」「飛躍しない」の朱書きを最後まで多数に書き加えなくてはならなかった。

③の項に関する内容

15回目の時間に, 事後アンケートとポストテストの実施をして, プレテストとの比較を行った。

調査内容: 文章表現意識・表現の上達感
 ・学習達成感
 ・内容理解度

事前と事後の意識の比較

- 1 学習意欲 = 本授業への意欲
- 2 表現意識 = 書くことへの気持ち
- 3 表現力 = 書く力

	事前 %	事後 %
1 学習意欲有り	45	68
2 表現意識有り	44	87
3 表現力 有り	32	向上 94

文章表現に対する意識は明らかに向上していることが分かる。しかし, 授業内容については, 「難しかった」の回答が61%もあったこ

とは, 次への大きな課題である。

ポストテストでの結果

①小論文の書き方として理解したこと

②文章を書く意義をどのように理解したか

この二点の調査から, 上記①については, アンケート上では, 理解ができたと回答したのが90%に及んでいたが, それを具体的に文章表記で表す理解度では約60%であった。「小論文の書き方のポイントは何か」の質問になると, 的確に文章で書くことができないことは, 理解が十分でないことを表していると捉えた。

②に関しては, プレテストからの課題としたことである。「文章を書く意義・必要性について」記述させたのであるが, 書くことを思考力と結びつけて理解できている回答は, 41%に留まった。これを授業の中心課題とした筆者には, 意外な結果である。

毎時の授業目標の明確な提示が学習意欲にも, 学習成果にも還元されることを考えて, 意識化を図ってきたが, 授業者と学習者との目標意識には格段の差があることが明確になった。学習目標の提示方法, 今後の課題とすることである。

その他ポストテストとして, 授業展開の方法についての回答も求めた。学習者の表現力の格差から, 5回の論述に対しても, 相反する意見など多様な回答があった。此处ではそれを割愛するが, それら意見の全てが, 健全な学習者であったことが浮かび上がる内容であり, 「自己表現」の授業に正対していた学習者たらであったことが把握できるものであった。

4 研究のまとめ

本稿は, 文章表現力育成を軸に「授業内容についての学習者の理解の促進」を目的とし,

学士力育成を旨とし初年次教育のプログラム構築に見合う「自己表現」授業の内容追究であった。

4年次に至って、就活に必要なエントリーシートの記載に手こずっている学生たちの現状からも、文章表現は喩え情意的文章であっても、その表現には筋道をもって表現ができるようにすることである。ここでの小論文の学習は、書くこと、即ち考えること・筋道を立てることの習得としてきた。

学習者の実態と意識状況の把握、論述の準備・時間内論述の授業展開、授業検証、添削・評価、これら一連の試みは、学習者の文章表現力の向上に繋いだ、と明言しかねる。しかし初年次教育の科目に、書くことの学習を位置づける意義は格段に大きい、とこれは明言できる。学習者は、真っ正面から自分と正対する時間を持ち、自分の姿を認識する機会をつくりだしていた。また、設定したテーマに向かって、考え、自分を表現することばを探し他者に示していく行為は、属する専攻への自己確立を図ろうとする姿に直結していることを筆者は実感した。事後アンケートに「論述する課題が難しかった、もう少し易しいものを……」の声は、真剣に向き合ってきたことの証であると捉えられる。書く力をつける学習は、いくつもの貴重な付加価値をもっていることも十分把握できた。

今後の課題は、論述テーマのより適切な選択である。書きたい意欲と、思考の深化は密接である。広く期待しなくてはならない課題としては、学習者がそれぞれに習得した力を、出ていく社会が求める表現力へと、この後の授業の中で自分らしく主体的に向上させていくことである。それは、意図的指導として、初年次教育プログラムの学習内容の関連性を図ることに帰していきたい。

注記

- 1) 小川宣子・他『学資力育成に当たっての初年次教育の構築』岐阜女子大学紀要39号

参考文献

- ・速水博司『文章表現入門』蒼丘書林2004年
- ・荒木晶子『自己表現の教室』情報センター出版局 2000年
- ・鷺田小弥太『知的生活を楽しむ小論文作法』三一書房 1992年
- ・戸田山和久『論文の教室』NHKブックス 2002年
- ・西 研 他『考えるための小論文』筑摩書房 1997年
- ・筒井洋一『大学生の表現能力をどのように学問へ導くか』web Sight